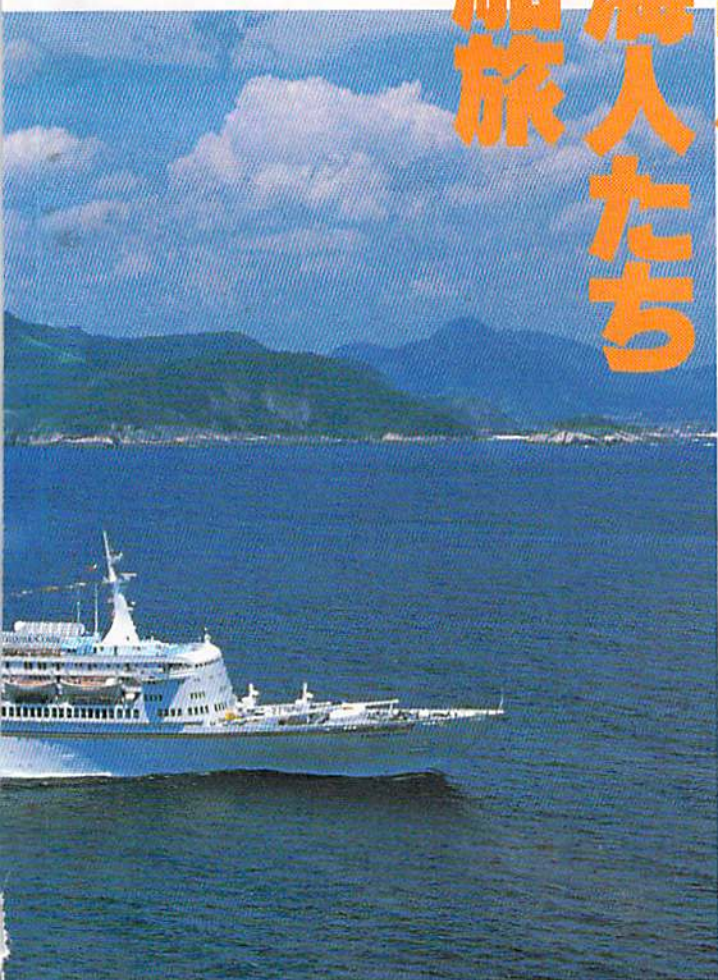


渡辺節子

# 楽天的な 地中海人たち との船旅



大きなガラス窓の  
プロムナード



地中海をいく、ユージェニオコスタ

クルーズコース：ジェノバ～マラガ～ジブラルタル～セウター  
イビサ島～サントロペ～ジェノバ  
クルーズ日程：5月1日～7日  
料金：640ドル～2,120ドル

## 言葉は通じなくとも……

5月1日、快晴。乗船直後、国際関係担当副支配人のエンリカさんが「あなたにプレゼントがあります」と、にっこり。なんとそれは、ハンサムな日本の若者だった。フロレンスに住むデザイナーのコージ君は、日本の代理店からの依頼で、通訳兼ガイドとして乗船してくれたという。

船内は、さすがイタリアの船といった感じ。落ち着いていて渋いのだが、同時に華やかさ、明るさがある。ラウンジの両側にはガラス張りのプロムナードがあり、ゆったりとした椅子が用意されている。ここから眺める海は素晴らしい。インテリアの基調は地中海の青をモチーフとしているようだ。客室506、レストラン2つ、バー5つ、サロンドーム、劇場に映画館、デイスコにカード室、ジム、サウナなどの設備は他の船にもあるが、食堂の前

にチャペルがあるのには驚いた。さすがはカトリックの国だ。キャビンも広く、クロゼットもたっぷり収納できそう。不精で整理の苦手な私は、これが嬉しい。早速、キャビンスチュアードが挨拶にきてくれた。ドミニカ人だ。のんびりしていて良く英語が通じない。でも、日に何度も部屋の掃除にきてくれるなど、サービスは上々。

乗客はほとんど地中海人のようだ。気軽な地元向きのクルーズらしい。地元では中の上位の船とか。新婚旅行の若者か、50代以上の夫婦や仲間のグループ客が多い。船内放送もイタリア語、スペイン語、ポルトガル語、フランス語、ドイツ語の順、最後にやっと英語になる。デイリープログラムやメニューは英語版がある。日本人は勿論我々だけ。今年始めての日本人だそう。とにかく船員の皆さんには親切にしてもらった。私は片言のイタリア語も話せないのだが、英語の通じる船よりずっと人々と心が通った。言葉はコミュニケーションのほんの一部、たかだか30%と専門家に聞いたことがある。言葉が通じない分、全身で好意を示してくれる。

船旅の良し悪しは食事で決まる、とさえ言える。今回テーブルは正面の最高の席。ウェイターのサンチヨスさんは、コスタリカ出身。とても親切だった。コージ君の指導で毎夜私たちに白いご飯を炊いてくれ、白身の魚もあっさり塩焼きにして出してくれた。コージ君は毎回日本語メニューを作ってくれ、正に至れり尽くせり。

5月2日のガラの晩餐を紹介してみよう。ニンジン、セロリ、キュウリのスティック、えびのカクテル、レバーペースト、スープ、トマトベースの Pasta、サーモンのステーキ、牛ヒレステーキ、鴨のオレンジ炊き、トマト、ホーレン草、サラダとくる。デザートは、ミルフィーユ、クッキーアイスクリーム、トスカリーナワインのシャーベットとフルーツであ

今度はどんな船に乗ろうがしら。  
取り寄せたパンフレットを、  
あれこれ見比べるのも船旅の  
楽しみのひとつである。  
数ある中で、  
日程的にピタッと当てはまったのが、  
イタリア船籍のユージェニオコスタ(32,753トン)  
で行く6泊7日の西地中海クルーズだった。  
ところで、イタリアといえばラテン。  
ラテンといえば、  
"ノープロブレム(問題ない)"である。  
こちらが血相を変えて  
"プロブレム/(たいへん)"と駆け込んでも、  
首をすくめて両手を広げながら  
"ノープロブレム"で終わり。  
楽道家でおおらか、大雑把でいい加減。  
でも憎めない。  
地中海気質とでもいうのだろうか。  
よーし、そんな地中海人たちと  
一緒にクルーズを楽しもう。



チーク材を用いたデッキで日洗浴



明るいカフェテリアは、  
ランチにぴったり



パゲッティパーティーの時は驚いた。地中海人  
達は大皿に何度もおかわりして、またたく間に  
10皿位重ねちゃう。飾り付けに使っている  
パイナップルやスイカまで食べちゃう。その  
上にジェラートを食べ、それからまた一遊び  
するのだ。

る。味に癖がなく、  
万人向きと思う。  
とくにパスタ類は  
おいしかった。ト  
スカーナの白ワイ  
ンもおいしく値段  
も安い。それにラ  
テンの囲らしく、  
昼食も豪華だった。  
さらに真夜中の  
晩餐会ミッドナイ  
トピュッフェも、  
いつも大盛況。ス

**素朴に、無邪気に**  
だから早朝、甲板には誰一人いない。地中海の日の出を見ようと出かけても、ただ船員が甲板を洗っているだけだ。1,500人位の乗客はまだ夢の中。9時の体操のクラスも出席者は日本人だけ。先生さえ出てこない。この辺のいい加減さがラテンなのだ。プログラムのちゃんと載っているのに、先生が出てこないなんて他の船では考えられないこと。でも、ここ地中海ではそんなこと、ノープロブレム。私たち真面目人間は、そこでラジオ体操だけのヨガだのをしてしまった。アメリカ人の多い船では、朝早くからジョギングとシエイプアップのクラスが満員だが、地中海人は朝早く起きてまで痩せようとは思わないらしい。ストイックで勤勉なプロテスタントと享乐的なカソリック教徒との違いか。

それは遊び方にも表れる。欧米人(地中海人はヨーロッパ人ではないと思う)も遊び上手だが、どこか重い。無理に笑わせたり、馬鹿になつて見たいなところがある。地中海人は素朴で無邪気に遊んだりやう。例えば、日本の漢字はいくつある? なんていう単純なクイズにも夢中になる。分かるわけがない。ダンスコンテストでは、ごく普通のカットプルが、ジルバ、タンゴ、ワルツと掛け声に合わせて踊って素人が審査する。結果なんてどうでもいいのだが、参加している自分達が楽しめば、一時が万事、カラオケやビンゴでもそう。ワイワイ言いながら、いつの間にか言葉の通じない私たちが巻き込んで仲間にしちゃう。お返しに仲間の2人が、最後の晩に日本舞踊を披露した。大勢の方に見ていただけ好評だった。  
船長のピエロカローネ氏は物腰の優雅な海の男。大変親切にしてもらった。セウタを出航するときは、長い間ブリッジに招いてくれ、パイロットの誘導で、船が方向転換をするの



何度参加しても楽しいブリッジ見学

楽天的な  
地中海人た  
ちとの船旅



プールの隣にあるジャグジー

最後部にはデニスコートも備えられている



郷に入れば郷に従え

船内の事ばかりで憧れの地中海や寄港地のことが後になってしまった。太陽海岸はとにかく日差しが強い。こんなに光と影がはつきりしている土地から、ピカソやダリ、ミロなどのキュービズムが出てきたのは当然の事に見える。マラガの大聖堂のファサードだ。レリーフがはつきりくつきりしていてまちがいにキュビズムだ。日差しがどんなにアートの影響することか。パリのノートルダム寺院のファサードと比べてみると良くわかる。勿論、気候が人間に与える影響もはかりしれない。一年中太陽がさんさんと降り注ぐ地中

海の気候がおおらかに楽天的な地中海人、ラテン人を作ったのだろう。

この船旅で、サントロペの受胎告知美術館に出会えたのも嬉しかった。海辺に建つ1510年頃の受胎告知教会を小さな美術館に改造したものだ。この地を愛したマチス、ボナール、ブラック、ルオー、ユトリロなどのコレクションもさることながら、素晴らしいのは海に向けて大きな窓を幾つもあけ、サントロペの美しい海を借景していることだ。溢れるような陽光が惜しげなく絵に降り掛かり、海と絵と光が一体になって素晴らしい空間を作り出している。

また、船内で知り合った紳士が薦めてくれた、小さな漁村ポトワイノ。ジェノアから20キロ、リエラの小さな入り江だがとても魅力的なのだ。古代ローマ時代から美しさで知られていて、後にベトラルカも熱愛したそう。それに、お土産屋のおばさんお薦めのレストランで食べたスパゲッティの美味しかったこと。生のままの空豆をおつまみに飲んだワインも最高。私たちは、空豆を差し入れてくれた土地のおじさまたちに、日本のお菓子をプレゼント。初めての味に目を白黒させて、それでも、ポノノポノノ（おいしい、おいしい）と食べてくれた。

思い込みが期待外れになる事もあれば、思わぬところに意外な発見や出会いもある。これが旅の魅力だ。郷に入れば郷に従え。案内書より、土地の人に聞くのが一番である。土地の人に耳を傾けることは、良い旅の秘訣であらう。

言葉は通じないのに、たくさんの人と一緒に心から笑ったり、本気でドキドキしたり、ワイワイ騒いだ10日間だった。時にはタクシーの運転手にボラれたり、かと思えば、お金が入らなくておまけしてもらったり。暖かい人間らしい人々と触れ合えたよ！船旅だった。思い出すのは、屈託のない笑顔、笑顔である。